

平成 28 年度第 2 回鎌倉市医師会立産科診療所運営協議会 会議録

運営協議会を次のとおり開催しました。

(敬称略)

協議会名称	鎌倉市医師会立産科診療所運営協議会	
開催日時	平成 29 年 1 月 31 日 (火) 19 時 30 分～21 時 00 分	
開催場所	鎌倉市役所 第 3 分庁舎 1 階 講堂	
委員 出席者	特定非営利活動法人 小児臨床研究支援ネットワーク 理事長	名取 道也
	特定非営利活動法人 医療ガバナンス研究所 理事長	上 昌広
	弁護士	増本 敏子
	特定非営利活動法人 鎌倉市市民活動センター運営会議 前理事長 県立高校、私立高校非常勤講師「食」担当	渡邊 公子
医師会・ 市出席者	鎌倉市医師会 会長	井口 和幸
	鎌倉市医師会 副会長	高橋 博文
	鎌倉市医師会 理事 (産科診療所担当)	西尾 佳晃
	産科診療所 所長	高山 照雄
	鎌倉市医師会 産科診療所顧問	黒川 民男
	鎌倉市健康福祉部長	内海 正彦
次回開催 予定日	平成 29 年 7 月下旬	
問合せ先	鎌倉市医師会 事務局 電話番号 0467-22-1245	
会議記録	以下のとおり	

1 開会

事務局 こんにちは。定刻前ですが、皆さんおそろいですので、始めさせていただきたいと思います。本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。まず、冒頭に、鎌倉市医師会に次長職として一人、入職しておりますので、今日伺っておりますので、ご紹介をさせていただきます。

(自己紹介の形で紹介された)

事務局 それでは、今年度第 2 回の鎌倉市医師会産科診療所運営協議会を始めたいと思います。本日は、田坂先生がご都合でご欠席ですので、ご出席委員は 4 名で、過半数を超えておりますので、本協議会設置要綱第 6 条第 2 項

の規定により、会議は成立しておりますことをご報告いたします。それでは、この後の進行を名取会長にお譲りしたいと思います。よろしく願います。

2 平成29年度第2回会議録確認

会 長 それでは、最初に、前回8月の議事録が事前に配付されておるかと思いますが、これについては、特にご意見もいただけていないようなので、ご異論がなければ、これで承認とさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

事務局 ありがとうございます。議事録につきましては、鎌倉市医師会のホームページに掲載させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

3 議題

(1) 平成28年度の決算状況等

会 長 それでは、まず、本日の議題の最初、(1)平成28年度の運営状況について、ご説明をお願いいたします。

事務局 産科診療所事務長の安田でございます。座って説明をさせていただきます。資料1から7になりますけれども、資料2と3につきましては、市から説明をさせていただきます。私どもとしては、資料1、資料4、資料5、資料6、資料7とこれをまとめて説明をさせていただきます。まず、資料1、分娩件数についてでございます。本年度12月末までの件数は135分娩、前の年に比べまして、30分娩、18.2%の減になっております。住所別の内訳といたしましては、市内の方が88人、全体の65.2%、里帰り出産が29人、全体の21.5%、市外の方が18人で13.3%という具合になっております。ちなみに、27年度につきましては、市内の方が68.5%、里帰りの方が20%、市外の方が11.5%ということで、若干ですが、市内の方が減って、里帰りとし外が増えたという状況でございます。月平均にいたしますと、15分娩となっております。帝王切開につきましては、11分娩、月大体1分娩の割

合で行っております。母親の出産時の年齢につきましては、開設以来の統計で、一番多いのは31歳から35歳、全体の42.3%を占めております。続きまして、資料2と3を飛ばしまして、資料4に参ります。既に経過している期間の数字については、転院等の関係部分は減じた数字になっております。この表につきましては参考としてご覧いただければと思っております。続いて、資料5の28年度分娩件数、見込みも含めた分娩数でございます。今年度の残り3カ月の、既に1月は今日で終わりでございますけれども、お手元の資料につきましては、12月31日までの数字を捉えております。1月、2月、3月の予約件数については、12月31日現在で43件という数字になっておりまして、全て予定日どおりに分娩ということになれば、今年度の分娩件数は178分娩という具合になります。ただ、通常、約1割程度の転院等によるキャンセルがございますので、それを見込みますと173分娩という具合に今後なっていくと思っております。既に、1月の1カ月間で2件の転院が生じております。なお、新年度4月からの7月までの分娩予約状況につきましては、前年の同時期に比べて24件、これは4割ほど減っているということで、減少傾向がまだ続いていると考えております。続きまして、資料6、外来診療件数等でございます。外来診療件数は、3,607件で、前年度同時期と比較しまして、457件、11.42%の減となっております。その内訳は、妊婦健診が2,674件、全体の74.1%、前年に比べまして16.2%の減少。一か月健診は158件、全体の4.4%、前年との比較では19.4%の減。二週間健診が125件、全体の3.5%、前年同期は23.3%の減となっております。母乳外来が235件、全体の6.5%、前年同期は37.4%増えております。がん検診を含みます婦人科が391件、全体の10.8%、前年に比べて35.3%増えております。予防接種が59件、全体の1.6%、前年に比べ11.3%の増となっております。入院人数は179人で、ベッドの利用率は44.55%でございました。続きまして資料7に移ります。各種教室の開催状況でございます。妊娠初期と後期の二部制で実施をいたしております両親教室は、29回、合計177人の参加がございました。しかしながら大幅な減少となっております。市からの受託事業「はじめまして赤ちゃん広場」は9回、80組の参加

でございました。また、産婦、新生児等の訪問指導事業への協力として行っております新生児訪問は、93件を実施いたしました。その他の教室につきましても、記載のとおりでございます。以上でございます。

鎌倉市 それでは、資料2、資料3につきましてご説明申し上げます。まず、出生連絡票月別提出件数（市内施設及び市外地域別出産割合）状況等についてですけれども、資料2をご覧ください。この資料は、月別の母子手帳の交付件数、それから出生連絡票の提出件数、ティアラかまくらにおける外来受付件数を表したものです。出生連絡票につきましては、生まれ月ではなく、窓口や郵送で支所等に届け出があった月で集計しておりますので、未記入の方もおりますし、完全なデータではありませんが、施設及び地域ごとの分娩件数等の動向は把握できるものと考えております。それでは、一番下の欄、平成28年度につきましては、11月末の母子手帳の交付件数が754件となっております、平成27年度同時期の803件から49件減少している状況です。鎌倉市全体の出生票提出状況につきましては、平成28年11月末現在、出生連絡票の受理件数は745件で、平成27年度同時期の771件と比較しますと、26件減少しております。この8年間で、平成26年度の741件に次いで2番目に低い数字となっております。続いて、平成28年度の出産場所の状況ですけれども、市内4施設は、745分娩中420分娩で、全体の56.4%となっております。平成27年度同時期は、416分娩で全体の54%であったため、分娩数割合としては微増の傾向になっております。また、県外にある出産割合が16.9%で、前年の17.6%に比べると0.7%減少している状況です。市内420分娩の施設別割合で見ますと、ティアラかまくらが10.1%、平成27年度は13.1%でした。湘南鎌倉総合病院は、平成28年度が18%、平成27年度は23.7%でした。矢内原医院は、平成28年度21.2%で、平成27年度が17.1%、また平成28年5月に開院いたしました湘南鎌倉バースクリニックが、現在7.1%となっております。前年度比でティアラの割合は約3%の減少で、湘南鎌倉総合病院も5.7%の減少、矢内原医院は4.1%増、湘南鎌倉バースクリニックが新しく開院しましたので、53分娩でプラス7.1%となっております。なお、湘南鎌倉総合病院と湘南鎌倉バースクリニック

を合計しますと、187分娩となっております、前年度の湘南鎌倉総合病院単独での実績が183分娩でしたので、それから比べましてもプラス4分娩、2.2%の増となっている状況です。続きまして、資料3をご覧ください。この資料2の数字と表をわかりやすくしたものと、一番下に鎌倉市内、近隣市、神奈川県内、県外での出産数及び割合で、市民以外の数も含めた分娩件数を記載しています。平成28年度分につきましては、いずれも資料2と同様に、4月から11月末までの分娩数となっております。前年度同時期の比較では、ティアラかまくらが122分娩で81.9%、湘南鎌倉総合病院が388分娩で74.9%、矢内原医院が333分娩で109.2%、今年度開院した2施設につきましては、湘南鎌倉バースクリニックが161分娩、栄共済病院が20分娩となっております。以上で説明を終わります。

会長 それでは、今ご報告をいただきました平成28年度12月まででございますが、運営状況、資料に関しましては1番から7番までが該当するかと思いますが、これについて、何かご質問等ございましたらいただきたいと思いますが。途中経過ですが、分娩数としては、ティアラが3%ぐらい少なくなっていて、矢内原医院が4%ぐらい増、同じパーセントと言っていいのかどうか分かりませんが、そんな感じで、湘南鎌倉はバースクリニックと合わせるとそう大きな変化はないといったような内容になっているかと思えます。分娩件数に対しては、大体そういう数字でございますね。資料6にございます外来診療におけるアクティビティ、これは妊婦健診とか1カ月健診とか、こういうものは分娩数に比例するものですから、このような数字になるんだろうと思いますが、その割には、母乳外来の数とかで非常に一生懸命、この数字が上がっているという感じがしますし、婦人科の検診数はむしろ伸びているということです。本来ですと、分娩を取り扱うということを主眼にして設立している組織でございますが、ほかに少しでもお役に立つことということで始めたほうが、むしろ伸びていると。一つには、この地域における分娩数自身もずっと減少傾向にあるということと、それから住民の方々の年齢の上昇と、それに伴う医療のどんな分野へのニーズがあるのかといったようなことも、多少反映されているのかなと思

ます。何か、ご意見ございますでしょうか。この数年の傾向を見ると、少しずつ少しずつ減っているというのが、前年、前々年からずっと議論をさせていただいているところではございますが、明確にそういう数字が出ているということですね。

委員 こんなに分娩件数が減っているのかと。ティアラだけではなくて、女性が子供を産む率が減っているなど。そこは何だろうと今ちょっと感じたところですか。仕事を持って子供を育てる大変さというか、そういうことが影響しているのでしょうか。全体的にですものね、ティアラだけではなく。

会長 日本の中では、東京の一極集中と随分言われておりますが、もう日本全体で人口が減っているわけですが、その中でも、この関東の1都5県以外のエリアの人口の減少というのは、かなり目立ったものがあると。

委員 独身の人も多いですね。

会長 聞いておりますし、平均初婚年齢の上昇というのも非常に顕著なものがありますし、どこまで本当かわかりませんが、マスコミ等に出てくるいろんな調査、アンケートなんかでは、男性の何割かはもう結婚するつもりはないというのも、聞いたことがあります。また、その辺はここで議論してもしょうがない問題なので。

委員 母乳外来というのは、どういうことで相談に来るのでしょうか。

事務局 まず一つは、母乳育児を進める上で、母乳の出をよくするための指導なり、そういうケアがまず1点。それからもう一つは、大きなのはいわゆる卒乳と言われている母乳をやめる時期、そのときの指導とケアということで、そこが一番多い中身です。

委員 そうすると、母乳で育てたいという人が割合多くなってきているんですか。

事務局 ティアラでは、基本的に母乳で育児をするということで指導しておりますので、ティアラかまくらで分娩した方については、産後もそういった部分で、のちのちの長期ケアをしていると、そういうことでございます。それから、他院で分娩をなさった方についても、なかなか母乳外来を丁寧にやっているところが少ないものですから、ティアラでは他院分娩者につい

ても希望があればお受けしていくということです。

委員 それで増えているということでしょうか。

会長 そこも少しニードがあるんですね。

(2) 平成28年度の収支（見込み）について

会長 よろしければ、それでは、平成28年度3月までの年度の収支の見込みについて、ご報告をお願いいたします。

事務局 それでは、資料8をご覧いただきたいと思います。28年度の収支の見込みでございます。28年度の分娩件数につきましては、当初予算で見込んでおりました210分娩、これに対して大幅に減少することが見込まれております。その分娩件数に大きく左右されます自費入院収入、これは当初予算に対して、上半期の実績として下半期の見込みの数から、2,121万2,490円のマイナスということで見込んでおります。ほかの診療収入につきましても、自費入院収入ほどではございませんが、減少が見込まれております。したがって、診療収入全体で、3,219万9,000円を超える金額の減少が見込まれることとなっております。支出につきましては、分娩件数、外来診療件数の減少によるものと思われまますけれども、事業管理費が490万4,900円、予算額を下回ることが見込まれております。しかしながら、人件費につきましても、退職補充を控えるなど、極力抑える努力をしておりますけれども、定期昇給等の関係から、579万9,000円を超える金額が、予算を上回る見込みでございます。現在、看護職2名の減の状態です。その結果、収支の差額が、マイナスの3,314万5,228円と見込まれており、市からの運営費補助の追加申請が必要となっております。市との調整の中で、市の2月補正予算で対応をする方向で、協議をいたしております。以上です。

(3) 今後の運営体制等について

会長 この資料9は、また後でご説明があるということですのでよろしいですか。一緒に、現状ということをお願いできますか。

事務局 資料9、運営体制の表でございます。平成29年1月1日現在の運営体制でございます。所長は常勤医師の高山でございます。就任して4年8カ月になります。医師の外来につきましては、高山所長のほかに、非常勤医師7名が担当をいたしております。内訳は、産婦人科医師として、慈恵医大から佐藤、川畑、齋藤の3名の医師、横浜栄共済からは加藤、土居の2名の医師、1か月健診担当の新生児科医につきましては横浜市大の岩間医師、病棟につきましては、外来に当たっていない高山所長と非常勤の産科医師で交代で担当をしております。当直につきましては、非常勤の産科医師が担当をしております。帝王切開に際しての麻酔科の医師は、東京麻酔グループから代表である吉野医師ほか21名の中からの派遣となっております。看護スタッフは、平成23年の当初は、師長1、常勤助産師9、常勤看護師3、非常勤助産師6の体制で始めましたが、現在は、常勤助産師が10名、常勤看護師1名、非常勤助産師5名、非常勤看護師1名の体制で運営をいたしております。外来については、常勤・非常勤の助産師・看護師2名が、病棟は、常勤・非常勤の助産師・看護師2名が、夜勤は、常勤の助産師・看護師2名が担当をいたしております。新生児訪問については、常勤・非常勤の助産師が交代で、月1回、行っております。両親学級は、常勤・非常勤の助産師・看護師が、月1日、1日に2回行っております。「はじめまして赤ちゃん広場」については、外部の講師をお願いをして、月1回、ティアラのロビーを使って行っております。その他の各種教室は、スリング教室、マタニティヨガ以外は、外部の講師に依頼をいたしております。事務員は、常勤2名、うち1名は育児休業中でございます。非常勤1名で運営をいたしております。以上でございます。

会 長 今、事務の非常勤は1名とおっしゃられたけれど、ここに2名と書いてあるんですが。

事務局 失礼しました。本来2名の体制で進めておりましたけれど、今欠員になっておりますもう1名の非常勤について、補充しない形で。

会 長 1名ということですか。

事務局 はい。失礼いたしました。

会 長 今、28年度の収支の見込みについて、お話をいただきました。分娩数の減少に伴って、約3,300万円の予定外の負担が発生するというございます。これは、2月の市の補正予算でお願いをする予定でいらっしゃるかと伺いました。何か、ご意見ございますか。

委 員 これはどうされるんですか。結構赤字が大きくなってきましたよね。非常勤のドクターのお金がかかっているんですか。

事務局 前回、割合がどのぐらいかお答えできなかったのですが、人件費に占める医師の報酬、給料の割合ですけれども、常勤・非常勤を合わせると約44%になります。非常勤だけで見ますと29.5%の数字になっています。なかなかその部分、単価を低くするわけにもいかないし、それからコマ数がもともと変えられないということもあって、ここを削るのは非常に難しいというのをございます。

委 員 難しいですね。もうそこを切るしかないですからね。

事務局 常勤を増やして、その分と考えないでもないんですが、今いろいろお話を聞いていると、常勤の産科の医師については、当直は基本的にやらないという方向が多いと聞いているので、当直を非常勤がやるとなると、常勤を1名増やしたとしても、あまり人件費に影響が出てこないのかなと考えています。

委 員 鎌倉市はどの辺まで出すのかなという、そこに尽きますよね。私はあまり利害関係がないけれども、1億円を超えてきて出すのは、さすがにちょっとしんどいでしょう。議会でもめるだろうし。

委 員 どうなんですか、議会の状況は。

鎌倉市 前回も、上限はどこまでというところは設定していない状況で、今年当初予算と補正予算を合わせますと1億3,000万弱になるところですが、実際にこの分娩の中で市民の方が出産している場合はさらに低くなっていくので、なかなか難しい状況にあります。

委 員 市長が決めることになりますね。いや、全く一般論から言うと、こちらはお医者さんの給料を下げるしかないですよ。税金を入れるのであれば。普通の民間病院だったらそうしますけれどね。医師会さんがどう判断

するか、私はわかりませんが。神奈川県って、比較的産婦人科医って余っているとは言いませんが、きょう私、調べてきたんですよ。四つ大学があって、産婦人科、産科も婦人科も合わせて、お一人ずつの医師一人当たり、常勤医師一人当たり何件分娩をとっているかということ、4大学で一番多いのは北里で、55分娩なんです。海野さんという院長さんが行っておりますね。聖マリアンナは一人20分娩、東海大は一人28分娩、横浜市大は28分娩なんです。逆に若い医者がむちゃくちゃ余っているということなんですよね。一人28件しか分娩とってないんですよ。一番多いのが、日本医科大学武蔵小杉は248分娩、常勤がとっているんですね。大学には若い先生いっぱいいらっしゃるんで、非常に分娩をアルバイト等でやられていて、実態はもっと複雑でしょうけれど、あまり経験を積めない方がたくさんおられるのは事実です。東京大学が15分娩、だから大学にすごくいっぱいいる。そのことが問題になっています。今、新専門医制度という議論をしていて、財務省の方々といろいろな方々は、そんなにむちゃくちゃして補助金を出せないぞと言っています。ちゃんとした配分をなささいと言われていて、市長会から、鎌倉市長に行くかどうかわかりませんが、市長会でも話題に出るとなっています。若いお医者さんと呼んでくるしか、多分現実的に、当直してくれる常勤医で年収1,500万円で働く人を呼ぶしか現実には多分ないので、湘南鎌倉がおやりになっていることですが、それ以外はかなり普通の企業の対応をせざるを得なくなりますよね。神奈川県は比較的大学にいっぱいいます。いろんなしがらみがおありでしたので、これ以上はちょっとわかりませんが、いないわけじゃないです。民間病院の損益分岐が、常勤医大体80ぐらいだと思います。愛育が80、愛育病院の財務が公開されているので、見ると8億円程度の赤字でした。更新投資が多いからですけどね。北里がトントン。大体60~70、一人当たりそれぐらいの分娩でトントンになるような単価がついているはずですよ。大学内にはものすごい安い給料で若いドクターがいっぱいいるはずですよ。ただ同然でいるはずなんですけどね。

会 長 なかなか難しい問題なんですけど、今の先生のお話は産婦人科医という。

委員 産科、婦人の両方ですね。

会長 数年前に、神奈川県産婦人科医会が出した予測で、僕も正確な話は覚えていませんが、何年後かには、神奈川県全体の分娩を賄えなくなるだろうという予測もあったんですね。それはどういうことかという、産婦人科医の中で、産科を担当する医者というのは割合が非常に低いということで、ほとんど今はお金が儲かる不妊症にいつている人が多いというような現実があって、訴訟リスクとかいろんなことを抱えた産科の医者のなり手が少ないというのもあるので、その辺どういうふうにかだと思えますが。先生のお話のように、需要と供給の関係ですので、神奈川県の中で、前回のときもこのお話をたしかいただいたと思いますが、常勤で働くお医者さんにアプローチしてうまく関係ができれば、それは大変喜ばしいことだと思います。ただ本来は、結局、一定規模の器があって、そこはもう固定的に費用が発生すると、それに付帯して収入となる分娩があればバランスが取れるんですが、分娩が減って収入が減ってきた場合に、こっち側の受け皿の支出を減らすことができないみたいな構造というのが基本的にあるものですから、どうするかなということになっているんですね。これは、前々からこのお話も出ておりますが、鎌倉市が鎌倉市医師会と一緒にあって、鎌倉市におけるこういう事業をどういうふうにお考えになっていかれるのかということに尽きるのかもしれない。

鎌倉市 どうなんでしょうか。

会長 いや、無理にお答えにならなくても結構ですけど。

委員 出産をされる方たちから見れば、いいお医者様がおられて、一つの産科の病院としての設備がきちんと整っていて、高過ぎはしないでしょうけれど、それなりの標準の給料も保証されている方たちが、人数もまずまず事足りるくらい働いておられた中で、出産件数が減っているんですから、出産する側としてはとってもいいですよ。すごくいいと思うんです。で、安全なお産もできるから。ただ、悲しいことに、収入と支出との関係で、どうしてもこういう状態でも赤字じゃなくってトントンだったら本当に理想的なんですけれども、悲しいことに、赤字がすごく多いと。こういう

ときに、鎌倉市が将来の鎌倉市民のために、生まれる子供やお母さんのために出費をすることは、本当に素晴らしいことだという意識がとても強ければ、これはこれでいいと思うんです。ただ、今どうなのかなということ私は私もわからないものですから、今議員の方がというよりは市民ですよ。市民みんなの理解がどうなのかなという点が、少し心配だということ。これでもいいんだというのであれば、何も言うことはないと思うんですけれどもね。

委員 でも、市民はあんまりよく思っていないということは、事実あります。いろいろ聞こえてくる話では。まだまだ、そうじゃないところで子供の支援をということを考えているところもあったりすると。今まであんまりなかったんですが、このごろちょっと聞きます。それで、どんどん赤字を、いつも市が補助金で埋めていいのかということは、ちょっと耳にします。

委員 そうでしょうね。

委員 ですから、考えなければ。だからといって、節約できるところが、これを見るとないんですよ。

委員 これは、あまり節約はそんなに考えられないんじゃないかなと思うんですね。

委員 できないんですよ。

委員 非常勤を減らせといっても、どうなんですかね。

委員 ですから、人件費、委託料も、これ賃貸料もとなると。ただ、このままでは、市民はいかないんじゃないかという気はしております。

会長 それは、恐らくはどこかにある一定の限界があって、そこを超えたらもう組織自体をやめるしかないという、きっとそういう話になっていくと思うんです。収入が減ったから支出を減らすということがセットできない話なので、収入を増やすか、やめるかの選択になるような気がちょっとするんですけれどもね。

委員 なるほどね。これは産科、出産にまつわる事業しかできないわけではないんですかね。

会長 いや、そんなことはないんじゃないですか。

委員 婦人科もありますよね。

委員 そうですか。

会長 統計のように数が増えていますから。

委員 婦人科で、今、例えばいろいろな婦人科の先生たちがいろんな仕事をやっていますけれどもね。アンチエイジングみたいなこととか、こういういろいろなことがありますよね。すごくはやっているみたいなので、産科以外のことに少し乗り出すというのはあまりよくないのでしょうか。どうなのでしょう。収入を増やすならばね。

会長 そうですね。そういう線でこの2年ぐらい前から、市で行う子宮頸がんの検診とか、あとはワクチンの接種とか、積極的に取り組んでいただきたいというお話があって、それは実行されてきていることと思いますし。

委員 増えてきているんですよね、これはね。

会長 ただ、それが分娩1件当たりの収入と、婦人科の患者さん一人当たりの収入でも、桁が。

委員 桁が違いますよね。それはそうですね。

会長 ゼロが二つぐらい楽に違っちゃいますので。

委員 今150分娩ぐらいですか、年間の分娩数って。トータル、今年は。

事務局 今年度は170を超えるぐらいだと思います。

委員 170ぐらい。いや、もし万が一突然倒れたら、どこかほかで吸収できるんですか。

委員 倒れたらというのは、どういう意味ですか。

委員 いやいや、だから、閉院しちゃった場合とか。

委員 なくなった場合ね。

委員 なくなった場合は、矢内原さんのところ。

鎌倉市 これまでの市内の出産の状況を見ていきますと、大体60%ぐらいが市内で出産されている状況なので、ティアラができる前は、本当に湘南鎌倉くらいしかなかったので、もっと30数%だったと思うんですけれども。それ以外、里帰りがあったり、県外・市外それぞれほかのところで産みたい人たちもいますので、何となく感触ですけれども、出生の60%ぐらいはカバ

一できれば、ベッド数としては足りてくるのかなとは感じています。

委員 旧鎌倉にあるのは今ここだけですか、今でも。

鎌倉市 地域偏在がありまして、御成方面ですので、旧鎌、この鎌倉地域にはテ
ィアラしかないという状況です。

委員 コストカットは常勤の若いお医者さんが来て、当直をずっとしてくれな
い限りは無理だというお考えなんですよね。そうしたら、補助金を入れる
か、ドネーションを頼むしかないんですよね。6,000万円ぐらいだと議
会を通過していたんですよね。ここのところグッと増えていて、6,000万、7,000
万円は議会を通過していたんですよね。となったら、いや、ジャストアイ
デアですよ。クラウドファンディングでも何でもして、真っ先に医師会の方
をある程度入れてもらってつなぐとしかしないと、現実無理ですよね。そ
れ以外は普通の民事でやるみたいに、院長先生の給料を下げてもう全部
下げてやるしかないんですけれど。あとは、市役所に医師会費として1億
円以上払えって言うか。市民は怒るでしょうけれどね。こうなると、鎌倉
市ですから、いろんな形で支援を市民にお願いするぐらいしか、維持でき
ないですよね。5,000万円取りにいくのか、3,000万円かで、戦略が全然違
うと思うんですけれど。福島県広野町の高野病院というのが頓死したんで
す、院長が亡くなって。あそこは患者が減ったので、常勤医2名を1名に
したんですけれど、1名にした理由はコストカットなんです。ここは違
いますよ。地方は診療報酬も下がって、患者も減っているんで、ダブルパン
チで来るんです。でも、非常勤のドクターの調達費がどんどん上がってき
たんです。一人の先生が亡くなった途端に倒れたんです。100人の寝たき
りの患者と、100人のスタッフが路頭に迷うんです。クラウドファンディ
ングをしたときに、1日で集まりました。18時間ぐらいです。それは、マ
スコミが騒いでくれたのもあるんですけれど、捨てたものではないなとい
う感じはします。もちろんそんな額じゃ行かないですよ。そんな額じゃ行
かないんで、福島県と広野町が今押しつけ合いをしているんですけれど
ね。旧鎌倉に1個しかなくて、200の分娩が頓死する。閉じられないんで
すよね。維持できないんですしたらどこかで調達するしかなくなるので、こ

れぐらいの額なんだというやり方次第かと思えますけれどね。億単位、何億単位かかるのは別ですけど。

会 長 同じ話になってしまいますが、どうやって、そのお金を集める集めどころというのが、鎌倉市から出していただくのであれば、市民の皆さんが、そこはお金を出すべきところだという認識を持っていただいて、そういう声を上げていただくということがないと、なかなかまた難しいと思えます。別の方法というのを考えると、今、上先生が言われたように、そういうファンディングというようなことがあるわけですが、でも、長期で考えると非常にまた難しいところがあるかもしれませんが、それはどこかでこういうこと、例えば鎌倉市における分娩施設ということに対して、何かしらの価値といいますか、そういったようなものをうまく見出していただけるようなところがあると、また話は全然違ってくると思いますが、いずれにしても今まで申し上げていることですが、応援団を。

委 員 医師会としてはどのようにお考えでいらっしゃいますか。これ、医師会産科診療所ということで、マイナスになって鎌倉市が全てというのか、医師会としてはどういうふうにお考えでいらっしゃるのかを、伺わせてください。

医師会長 基本的に、まず思い出していただきたいのは、この診療所は医師会が作りたいたいってつくったものではないと。市の要請によってつくられた診療所であると。ある意味で、今の状況をずっと考えていくと、だんだんと役目が終わってきたのかなと感じています。ただ、先ほど上先生が言ったように、旧市内に一つもないわけですよ。旧市内の人が、大船とかその外へ分娩のために行くというのは、意外と壁が高いというか、ハードルが高い部分もあつたりします。だから、旧鎌に何らかの形でこういう施設があることは、価値としてはあると思えます。ただ、それを維持するのに、これだけのお金を使わなきゃできないということを、よしとしているわけでは全然ないと思えます。ですから、そういうことも踏まえて、市の考え方だと思っています。市で決断してもらうまでは、我々はやっていくというのが前提です、医師会の立場としては。正直な話、何億かかろうが、

市がやっていくというんでしたら、それはそれでやっていくという話ですけど、そんなことはあり得ないと思いますし、今後どういう形で、市がこの事業について言っただけなのか。最近の市長のいろんな施策の中だけではなくて、厚労省、日本全国で言われているのは、妊娠から産後まで全て、子育ても含めて、そういうところまでトータルにいろんなことを事業としてやっていかなきゃいけないと言いはじめているといたしますか、前から言っていますけれど、ここら辺のところ、その辺の話が強くなってきたなと感じております。市長も、いろんな意味で、そういう発信を最近はやっとしてくれています。実は中学生までの小児の無償化というのが鎌倉市で決まりまして、中学生まで小児の無償化が始まるんですけども、そのときに市長が初めて、子育てとかそういうことに対しても大きなご意見を述べられています。その中で、この事業を考えてもらえれば、僕はいんじゃないかなと思っています。先ほども言いましたように、妊娠から産後・子育てまでという中には、出産がどこかに入るわけですね。その出産の1億円として、今我々はやっています。ただ、このやっている状況がこのままでいいとは誰も思っていませんし、何とかいろんな意味で改善できるんだったら改善して、継続できるんだったら継続できるように努力はしようと思っていますけれども、あくまでも市の施策の中で、これをどういうふうに考えていただけるというのが先だと思います。ですから、我々としては、その結論をある意味では待っている。待っているといっても、そう簡単にはつかないと思いますし、我々がこれを閉じるに当たっては、いろいろな問題もいろいろと出てくると思います。その件も含めて、市と考え、話し合っ決めていくということになると思いますし、それが具体的に今年度なのか来年度なのか、再来年度なのか、その辺のところはまだ全然決まっていますから、現実として、今このまま事業を続けていって、それにかかる費用については、市と調整しながらやるしかないというのが現状です。多分、29年度に関しては、それでいくしかないだろうと思っています。ですから、その間に、どういう方向でどういうふうに考えていくかというのは、お互いに市と医師会で考えていくというのが、現実

にこれから起きてくることだというふうなことは考えております。それともう一つは、こんなことは言いたくありませんけれども、とある病院で、妊婦さんに、あそこは潰れるから行くなと言われたという市民がいます。だから、そういうような話も、どこかから言われているというところもありますので、これはショックだったんですけれども、まだ潰れるのも何も決めてもない段階で、そういう話を言う産婦人科の先生がいたんで、びっくりしましたけれど。本当に、湘南鎌倉と湘南鎌倉のバースクリニック、それから矢内原先生、4か所でお産ができるようになった。湘南鎌倉は別ですけれども、ほかの2か所に関しては、我々が誘致したみたいなので、すから、もうちょっとその辺の概念をもって、今のことをやっていただきたいなと思います。

会 長 はい、ありがとうございました。

医師会長 ちょっと取りとめもないというか、決断をここで下さなきゃいけないというレベルでもまだありませんので、そういうところが今の我々の立場だと思っています。

会 長 はい。今のお話にも関係しますが、理想的には、鎌倉市がティアラの大改装の費用を、これは単年度で済む話だから2億ぐらい出してくれると、きれいになって、患者さんも増える。

委 員 それはそうですよね。

会 長 分娩場所を選択する妊婦さんは、きれいかどうかというのを物すごく大事になさっているんです。だから、分娩数を増やそうというのであれば、鶏と卵の話をするつもりじゃないですけれども、先にきれいにしてくれというのは、一つ有効な手段かなと。市としても、継続的な費用というのは、なかなか何年度かにわたる費用というのは出しにくいと思いますが、単年度の費用って割と、行政はどっちかという継続的な費用に比べると出しやすいと思いますので、実際きれいにするのに幾らかかるのか僕は全然わかりませんが、一回そういうのをお願いしてみるという手もあるかなという気がいたします。

医師会長 先ほど先生がいろいろと、神奈川県下のお産の状況と一人当たりの分

娩数とかそういうお話があって、よくわからない部分があったので、お聞きしたいんですけれども。要するに全体的に、僕もある程度認識はしているんですけれども、今の若い産婦人科の先生たちは分娩数が足りない。仕事をしていく中で分娩数が足りないんだというのは聞いているんですよ。ですから、その経験を増やす意味で、我々のところでそういう門戸を開くということで、安い賃金で人を集められるという可能性というのは、先生が先ほどおっしゃったように、あるのかなと思うんですけれども、具体的に先生のお考えはどうなんですか。

委員 いや、医師会長が公に各理事長に申し入れに行ったらいいと思いますよ。症例数が非常に少ないですから。産科だけ、婦人科だけといっても、半々にしたって40分娩ぐらいなので、全然足りないのです。今は逆に運動になっていますからね。新専門医制度って大学に置かなければとやっていると、あれを今とめているのは塩崎さんなんですよ。一回だめと言ってとめて。先生方が言ったら、研修医も若い医者もハッピー、病院もハッピー、全てハッピーなんですけれども、言いに行かないんですよ。北里はワイワイですよ。

医師会長 正直、今のティアラの規模というか、ティアラの状況の中で、研修医まで呼べるような。

委員 若い常勤医を週何回とか呼べばいい。それだけでコストダウンしますよね、一人で。保険と年金をつけてやればいいんですからね、大学院生を。当直幾らでもしますからね、あの人たちは。

医師会長 そういう状況が世の中にあるということは、いろんなところで聞いていたので、これからも、別にお産だけじゃなくていろんな疾患の件数、一人当たりの件数が少なくなっていて、経験ができないからという部分があるというのはよく聞くので。

委員 今、一番ねじ巻いているのが財務の主計官なんです。補助金を出せないで、こんなの言ったってと。産婦人科学会で25名理事がいて、24名が男で1名女、全員大学教授、元教授なんです。だから大学医局のためのルールをつくっていて。ちゃんと鎌倉で、旧鎌倉1名もいなくて、若い医者を出

せって、ご高齢の先生が一人でやっているんだみたいな話を言えば。それは神奈川県がやるのか、横浜市大かはともかく、政治的にはもたないと思うのに、誰も言いに行かないんですよ。症例数は少ないです。すごく少ないです、大学は。

医師会長 どうですか、会長、その辺は何か情動的に。

会 長 いや、私は最近の大学の状況はよく知らないんですけども、日本中の大学病院における各施設ごとの分娩数というのが、減っていることはもう間違いない。それはなぜかというのと、この30～40年で日本全体の分娩数が半分以下になっちゃっているわけですから、それは事実のことなので。それに対して、1年間で日本中でその産婦人科になる医師、入る医者の数というのはどうなっているかというのと、5、6年前に一瞬増加傾向があったんですが、この三、四年前また非常に少なくなっておりまして、日本全体で300人。僕も正確な数字は覚えてないんですけども非常に少ない数で、なおかつ、そこの中ではさらにまた、先ほど申し上げたように、若いうちのトレーニングの話は別です。今上先生が言われたのは、その分野の年代の話だと思いますが。少なくとも、その分娩を専門とする医者になろうとする人はいない。というのが僕の理解している現実。それと、分娩を経験して、自分がトレーニングを積むという目的で、どこかの施設に行く人がいるかどうかというのは、ちょっと別な話になりますが、それは僕はお答えする知識をもっていないので、例えばの話、鎌倉市医師会が、ここですと神奈川県だから、例えば横浜市大に、そういうことで若い先生を出すことは可能なのかという問い合わせをしてみますと、ご返事が来るかと思いますが。

医師会長 慈恵とも関連がありますので、慈恵医大にはいろいろな話は伺っているんですけども、研修医的などころまでは話していないんですけども、常勤の先生を出すのは難しいというのは大学では当たり前と言われてますし、常勤を出すにしても当直はだめだよという。

会 長 初期研修は無理です。なぜなら、やっていい病院の基準がありますので、ティアラはそれにももちろん該当しないので、初期研修は無理です。

委員 鎌倉市長が、厚生労働大臣に言いに行くのがいいと思いますよ。今一番もめているんです、ここ。大学病院に過剰に若い医師が集まっていて、若いというのは30歳代まで。40歳代以降はそんなに働かないので、30歳代までが過剰に集まっているんです。さらに集めようとしていて、どうなっているんだという話をして、今官邸の一番のトピックなんです。旧鎌倉でこういう状態なんだからちゃんとして欲しいって、大学病院の若い医者をまくしか多分ないんですよ、もう。

医師会長 ただ、正直、医者ของそういう手当に関しては、いろんなメソッドは、今お聞かせいただいているいろいろと考えることもありますがけれども、実は、医者がいれば分娩が増えるかということ、それもまた別問題なので、その分娩を増やす過程って、さっき名取先生が言ったように、きれいにするのが一番だと。それは十分によくわかりますけれども、そこまでリスクを負う、これからやるべきなのかどうかという問題も残っちゃうし。もう一つは、実は変な話、ティアラでお産をなさった方々にとっては、非常に評判のいい施設。それはもう皆さんもご存じだと思います。そういうものを残したいという気持ちは当然のごとくあるんですよ。ただ、先ほど言ったような現実問題として、残せない可能性もあると思っていますけれども、そういう意味で、ぜひ残したい。残すために我々はどういうことをすればいいか。正直、予算のところを見れば答えは簡単なんです。人件費減らしなさいというだけの問題なので、人件費を減らして、そのレベルを保てるのかどうかということにかかってくるのかなと考えています。だから、我々医師会として考えられることというのは、そういう方向で一つの診療所としての経営を、そういう形で見えていく。先ほど先生が福島の話をなさったと思いますけれど、そのときに医者が減って、医者が減ると今度は診療報酬とか患者も減るんですよ。患者も減って、だから増やそうと思って人を雇うと人件費がかさんで、悪循環に入る。今も我々がそういうことをやることによって、悪循環に入ってしまう可能性もあるのかなと、さっきお話を聞いて。

委員 こことはちょっと違いまして、広野町というのは本当の原発近くなんで

すが、原発から北のところは、震災前に六つあったのが二つになったんです。その結果、一つの施設というのは、一人の医者で230分娩とっているんです。稼ぎ頭なんです、その病院で。福島医大さんというのは一人15分娩か20分娩なんです。トータル400数十件の分娩を20人でやっているんです。産婦人科学会は、従来過剰な勤務はいかんと行って、集約化と行ってきたんですが、山を越えて、患者さんは集約せず医者だけ集約したんです。小田原と川崎みたいなものなので、もともと違うんです。その議論が今ありまして、ここは分娩施設が増えているんですよね。私が見ていて、どの辺が損益分岐かという、多分100、旧鎌倉でどれぐらい分娩があるかで、多分損益分岐は一定数が決まっていると思うので、足りない部分はどこかで借り入れるしかないと思うんですよ。旧鎌倉しか多分来てないと思うので、それは先生、どこまでの数、170分娩だったら、それは守ったほうがいいに決まっていますからね。残りの部分は持続可能な額にしていくしかなくて、増えている地域なので、分娩施設が普通減って縮小均衡になって黒字化しているんですが、ここは増えているので、神奈川はすごいんだと思うんですよね。だけど、中途半端な数になっているので、赤字がかさんでいるはずで、病院を建て直すと減価償却で真っ赤かになりますから、やらないほうがいいですよ。

委員 病院を建て直すというのは、例えば鎌倉の出産件数というのがどんどん増えていくのならいいんですけれど、減少傾向でしょう、これから先も。いや、減少かあるいは横ばいかでしょう。そうしますと結局お産の取り合いになりますよね。今4か所あるとするとね、4か所の中での取り合いで、だから、ティアラだけがたくさんとっても、どうなのかなということですよ。ほかの病院を潰して。

医師会長 300分娩はとれないと思いますけれど、もう一つは欲しいですねと。いや、本当にたくさんは望むべきじゃないと思います。規模的にいっても、いろんな意味でも、限界がありますから、一番最初にこれをつくるときに360分娩という想定でつくりましたので、それに合わせた助産師の数という形でやってきましたので、360分娩というのは一番のアップーリミット

だと思ってやっています、始めたときに300分産から320分産ぐらいで、このままいけばトントンだろうなというところで、病院が増えてきて200件台に下がるし。

委員 300分産だとすごくいですよね。

医師会長 300分産でしたら、申しわけないですけど、ここでそんな話をしないで、来年はどうしようという話で済んだことだと思いますけれども。でも、今の状況で300分産まで我々が受けられるかといいますか、増えるかといいますと、非常に厳しい判断です。今年、多分170分産ぐらいになって、4月から6月ぐらいの分産の予約を見ると、前年比で相当減っていますので、そうしますと、来年度は170分産はキープできないんじゃないかという予想が立つんですけども。一時、考えていたときには、200分産が、このティアラとしては市の中で一番価値を残せるのかなと思っていました。200分産やっていたら、どんな圧力があつたってやるぞと、医師会としては言える部分じゃないかなと思っていました。今回170分産に落ちたことについては、湘南鎌倉のバースクリニックができて、矢内原さんがやっとなんてできて、260分産が210分産に落ちたんですね。次の年を見たら、そのまま210分産だったんですよ。ただ、1年間最初の影響は大きいけれども、その後は並行していくかといったところに、今度またもう1軒ということで、170分産まで下がってしまった。平成29年度が、例えば170～180分産だとしたら、またそこをキープできる可能性が出てくるのかなと考えられるんですけど、今の時点でそこを想定するのは到底無理なので、お産を増やすための手段として何がいいのかなというのは、もうちょっと考えますけれども、我々としては少しでも人件費を削ることを努力しないといけないかなと、考えております。

委員 私も部外者として、鎌倉市といっても、旧鎌倉とそれ以外は違う文化圏ですよ。この手の施設が、それは昔からのコミュニティー一個あるほうがいいに決まっているので。鎌倉市政にとっては優先順位が最も高い一つのはずですから、市民の合意さえ得られれば、多分金額は問題にならないと思うんですけど。

医師会長 でも、先生、鎌倉市はそんなこと考えていませんから。市役所を深沢に移そうと考えていますから。とんでもない構想ですよ。鎌倉じゃなくなっちゃいますから。

委員 考えられないですね。

医師会長 ええ。それを平気でパブリック・コメントを求めていますから。

委員 何かあるんでしょうね。土建とか、何かいろいろあるんでしょうね。

医師会長 僕もそれが変わるまで生きていませんからいいですけど。

会長 それは、何か理由があってそういう発言が出てきていますか。

医師会長 広報を見ていただければわかるけれど、鎌倉の市役所がここにあること自体の問題点ばかり。

会長 何が問題なんですか。

医師会長 余計な話で申しわけないんですけど、僕だったら条例を変えて、ここに10階建て以上の建物をつくって、津波対策をして、それでもいいんじゃないかと思うんだけど、その発想がゼロで、この建物は使えないから移転するという話になっています。上さん、ぜひ反対してください。

委員 いろんな利益が出る方がいらっしゃるんですね。それはわかりませんが。

医師会長 それと同じことがティアラにも言えると僕は思っています。すみません。旧市内の人間のエゴなので、これは置いておきます。

委員 読めないですよ。170の分娩が消えた場合どうなるか読めないの。福島から消えたのは本当に大変でした。閉鎖すると物すごいいろいろ来ると。だから、こういう古いコミュニティから、こういう機関を減らすのは、想像もできないようなことが起こるので、やめたほうがいいと思いますけれどね。

医師会長 役所の人たちは、私の言っていることはいつも聞いているものだから、またかよと思っていますけれどね。

委員 でも、他人が言っていたからって、市長に報告でやりやすいですよ。財政的に、このぐらいの額でお困りの自治体じゃないと思うので。

会長 鎌倉市の人口の動態はどうなっておるんですか、ここ数年。減っている

んですか、増えているんですか。

委員 横ばいですよ、鎌倉はね。

委員 横ばいですよ。17万人。

会長 市の租税収入みたいなものは、少しをずつ増えておるんですか。

鎌倉市 景気によりますけれどもね。

委員 増えているでしょう。

鎌倉市 鎌倉は、個人市民税で持っているまちなので、あまり会社の影響というのは大きくは出ないんですけど。

会長 全体としては、別に減ってはいない。

鎌倉市 景気によって、落ちるときは落ちていますが、今はもう底をついたので、若干上がるぐらいの状況。ただ、底からの状態なので。

会長 底をついた状態なんですか。

鎌倉市 底をついています。

会長 そうなんですか。

委員 不交付団体なんですよ。

鎌倉市 不交付ですね。

医師会長 ちょっと前にもらったんでしょう。

鎌倉市 1回だけ。

委員 だったら、そんなひどいことは言わずに、切り詰めるだけ切り詰めてから。

委員 3、4年先の分娩件数はどうでしょう。3、4年先から4、5年先は同じでしょうかね。

医師会長 国の少子化対策がうまくいけば、1.2から1.5ぐらいまで上げられないとは限らないので、そういう方向にいけば、それはそれなりに全体に増える可能性はなくはないと思いますけれど、今どうなんですかね。

会長 結局、原因が将来に対する不安なんですよ、それこそ。

委員 若い人がたくさん流入してくる市とかあるじゃないですか。同じ東京の中でも、何々区には急に若い方が増えたとか。鎌倉はそういう可能性は。

医師会長 深沢のJRの跡地に新しいまちをつくるという計画はそろそろ始まるので、それは若い人たちを呼び入れるいい要素だと思います。ただ、市

役所とは別でしょうと思うんだけどね。市役所は鎌倉にないと鎌倉じゃないのかなという。

委員 私はそう思いますけれど、後ろの方々がお決めになるわけじゃないものですね。しょうがないですよ。

医師会長 こちらの方々はみんな外の人間で、意見が違うと思います。

委員 繰り返しますが、合併市じゃなくて、古くからの自治体の中で一つは必要だと思います。あまり通わないし。本当にいろいろなトラブルを起こすんですよ。ミニマム何例で損益分岐になって、どれだけ入れなきゃいけないかはやがて落ち着くでしょうから、コストを削ってみたいなのやった方が結果的にコストは低いと思いますけれどね。全員藤沢に行くと結構大変でしょう。トラブルは絶対起こるので。妊婦がたらい回しされて、救急車で回ると市長は飛びますからね。それは飛びますよ。若い人が来なくなるから地価下がりますから。

医師会長 こういう今の組織を非常にいい状態で保ってられるんですよ。分娩数を除けば。それを失うことの不安といいますか、損失と、これを継続するためにはどうしてもこれを削らなきゃいけないというところのせめぎあいかなと、今は思っていますし、それでもこういう組織が続けられるんだったらいいのかなと思うんですけど、それが可能なのか不可能なのか、正直な話、経営コンサルタントだとか、そういうレベルじゃなくて、僕みたいなレベルでは、そこは想像もつかない部分があります。

委員 黒岩さんところにも頼みに行ったらいいじゃないですか。だって、政令指定を除けば鎌倉市も最も大きい市の一つじゃないんですか。それで上位機構から出してもらえばいいじゃないですか。仲が悪いんですか。

医師会長 そこは一番、県の医師会が。

委員 そうですか。そうでしょうね。いや、そんなことを言わずに。

医師会長 県の医師会だけじゃなくて、この近辺でもまだいろんな問題がありまして、知事の意向と我々医師会とか、市町村と、いろいろとそごが生まれて、埋められていませんし。

委員 抱えているところで業務命令出せるところは、県とか。

医師会長 先生にお願いして、黒岩さんに。

委員 そんなのを言ったって聞かないですよ。

医師会長 僕が頭を下げますから。

委員 票をくれたら頭を下げるんじゃないですか。

4 その他

会長 よろしいでしょうか。それでは、今日のご意見を幾つかいただいたので、また少し事務局で整理をしておいていただきたいと思います。前回、傍聴に関するお話がございまして、これに関しての見解というの、事前に委員の皆様にお配りしたと思いますが、ここの運営協議会の設立者というのは鎌倉の医師会でございますので、鎌倉の医師会の会議では、今までそういう傍聴者を受け入れた経緯がないし、それから近隣の幾つかの医師会の状況を調べていただいたら、そうではないということなので、よろしければ、医師会の意向もあり、とりあえず、傍聴に関しては待っていただくというか、控えていただくと。また、そのうち必要であれば、議論を再開すればと思いますが、それでよろしいでしょうか。

医師会長 傍聴に関しまして、我々の理事会の中でもいろいろと話し合いをいたしました。意見として、傍聴してもらったほうがいいんじゃないかという意見もありまして、我々も、そういう部分は確かにあるのではないかと考えています。ただ、市と違いまして、医師会がやっているところで、悪意を持った傍聴人が来た場合に、医師会は耐え切れないと思っています。ただ、市だったら幾らでも耐え切れます。公共のものですから、市が幾ら責められたって市は耐えられます。でも、医師会は、それに対して、申しわけないんですけれども、耐えられるほどの公共性を持っていませんので、そういう意味を含めて、傍聴してもらってもいいんだという気持ちは十分にあります。ですから、これが市が主催する会議であつたら、我々としては傍聴に関して何も意見を差し挟める立場ではありませんし、オーケーだと思います。ただ、申しわけないんですが、医師会というものが、今言ったように耐えられるか耐えられないかという問題だと思います。世間のいろん

な、わかってないような、悪意を持って批判された場合に、我々医師会はそれに耐えられるほどのものは持っていませんので、市がそれをカバーしてくれる、保証してくれるのであれば、傍聴も結構だと思っておりますけれど、そういうことで、お決めいただければありがたいと。

会 長 ありがとうございます。

委 員 いろんな人がいますからね、難しいですね。

会 長 モンスターというのがいっぱいいますから。それでは、今後のスケジュールについて事務局からお願いしたいと思います。

事務局 次回の開催時期ですが、平成28年度の決算の数字が出そろったところで、資料等々とあわせてご用意いたしまして、開催したいと思います。毎年度7月に開催をさせていただいております。昨年度はちょっと遅くなったんですが、いろんな関係で7月の後半でお願いできればと思っております。例えば火曜日でいきますと、18日とか25日ぐらいになるかと思っておりますけれども、また改めてご連絡申し上げますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。以上でございます。

会 長 ありがとうございます。少し早目に打診をしていただいて、皆様のご都合もあるかと思ひますので。

委 員 火曜日なんですか。

事務局 委員の先生方のご都合によりまして、今まで大体火曜日、もしくはいろんな会議等の関係で水曜日ということでしたが、ご都合のよろしい曜日がございましたら、検討させていただきますけれども、ご都合ございますか。

委 員 いや、早く決めていただければ、いつでもよろしいんですが。

委 員 私は、夜は構いません。

事務局 いずれにしましても、私どもの決算が閉まるのが、6月の最終日曜日がこの決算が承認される総会でございますので、その後に、実はこの運営協議会の前にティアラプロジェクトというものがございまして、そこで一応いろんな検討をさせていただいた後、2週間後に協議会ということですので、早くても2週間ということになりますと、4日が第一火曜日ですので

18日。

会 長 いずれにしても、今のご予定で決まってしまうので、それは見通しが立つことですから、今増本委員がおっしゃられたように、少し早目にと
いうことなんで、5月ごろになったら、このころと。いずれにしても、先
ほどお話があったように、7月の十何日と、また二十何日という話だと思
いますので、ご通知をいただければと思います。

事務局 よろしくお願いいたします。

会 長 それでは、本日の運営協議会はこれで終了させていただきたいと思いま
す。どうもありがとうございました。